

福田さんの思い出

林 隆 広

今から何年前だろうか。多分、約9年前。少しずつ本土に近づいていってるよ、と馬鹿にされているのか励まされているのか、よく分からない言葉を同僚にかけられ、生徒も少なく、離島からの離任の代名詞でもある紙テープも「蛍のひかり」の音楽もなく、私と妻は朝靄のかかる上対馬の比田勝港をジェットfoilで出航した。

生徒が少ないのは当然だ。何しろ出航時間が朝6時と早い。上対馬から壱岐への引っ越しは容易でない。まず荷物が直通で送れない。上対馬から博多へ、博多で荷物を別船に積み替えて壱岐へと運ぶ。車で巖原へ移動し、そこからフェリーで壱岐に渡るという方法もあったが、車で上対馬を離れるのは嫌だった。出張も、生徒を陸上競技の試合や遠征に連れて行くのも、ずっとこの港から船で出た。何十回も出た。だから、見送りが少なくても、紙テープがなくても、船で上対馬を離れることを選んだ。

福田さんのことを想う時、なぜかこの時の情景が序章のように思い出される。それは福田さんが私と同じく、上対馬で教鞭をとっていたからかもしれない。また、同僚や生徒との別れの数時間後には、福田さんと会って、初対面にもかかわらず馬鹿話をしたからかもしれない。幸か不幸か、記憶に残る福田さんと交わした話しのほとんどは、どうでもいい、くだらない話ばかりだ。

考古学にも埋文行政にも、まったくの素人である私は、壱岐に赴任してしばらくした後、福田さんと一緒に発掘することとなった。もちろん、ただの足手まといである。福田さんは手取り足取り、私に発掘のことを教えてくれなかった。福田さんは当時、報告書の執筆と編集に追われ、私の教育どころではなかった。いよいよ発掘調査が始まった。まずは重機による表土剥ぎだ。福田さんと私は立会のため重機の近くに佇んでいた。しばらくすると福田さんは事務所に帰っていった。報告書との決闘に終止符を打つために（その後、もうしばらくかかったが…）。残された私はゴロゴロと耕作土から掘り起こされる弥生土器の破片を、おろおろと拾って回った。本格的な発掘もいくらか過ぎ、私はただの足手まといから仕事の遅い記録員になった。福田さんは竹ベラを片手に調査区を颯爽と駆けめぐる。発掘作業員へダジャレなのか指示なのかよく分からない指示を出し、土層断面に層序の分割線を入れる。ある時、やっかいな土層を前に何時間も苦戦していた。そんなときは右手にネジリ鎌をもち、発掘作業員が清掃した土の壁をさらに削りに削る。削った土で踝が埋まるほどに。土層断面図の実測をしようと後ろに控える私に、福田さんはにこやかに、あとは君に任せる、とって軽やかに次の調査区へ移動する。そして残された私は、最後まで層序の分割線が完結していない（多分、途中でよく分からなくなったのだと思われるが）土の壁を前に、ブツブツと禅問答を唱えながら竹ベラを道具箱から取り出すのだった。次の年も福田さんと一緒に発掘した。前年以上に福田さんは報告書と格闘することになった。しかも相手は総集編。その影響で2年目の私が報告書を書くはめになった。そんな私に気を遣ってか、深夜まで残って作業する私に（福田さんも残っているのだが）、ハヤシくんタバコでも吸おっか、とよく声をかけてくれた。そんな時は福田さんのタバコが切れている時だ。

福田さんは私に、考古学に魅了された人間の姿を見せてくれた。私は福田さんのようになる気はないが、福田さんがいたから、こんな業界に9年も入れたと思う。